



アキノ氏暗殺事件、その後

小 舟 浩 治*

1. はじめに

1981年4月から84年4月までの3年間、在フィリピン日本大使館に勤務し、その間技術屋としてそれまで十数年の経験とは全く無関係な業務に携わる機会を得ました。大使館では主に日比の経済協力に関連した仕事を担当し、政治の動きとは余り関係なく、運輸・通信関連の開発プロジェクトを追って最初の2年間を過ごしました。

ところが、1983年8月にマニラ空港で起こったアキノ氏暗殺事件は次第に私共経済班の仕事にも影響を与えるようになり、無関心で居るわけにはゆかなくなってきました。最近日本国内で新聞やテレビで報じられるフィリピンに関するニュースから、そろそろ薄らいできた私の記憶をたどり、また自分勝手な想像も加えながら当時の状況を書いてみたいと思います。

2. 1983年8月21日

この日は丁度日本から来客があり、マニラ空港まで出迎えることになっていたが、あまりの空港の混雑にとっても客人が見つかろうにないので、ホテルの方で彼らの到着を待つことにした。ホテルに向う途中、運転手からラジオがニノイ（アキノ氏）が殺されたと報じていることを知らされた。もし同じことが日本で起こったら、その夜のテレビは特別番組を組んでこの事件を報じることであろうが、翌日になっても新聞・テレビは何故かこの件については沈黙していた。

その後遺体が軍から家族に引渡され、彼の故郷での葬儀、そしてマニラの北にあるサント・

ドミンゴ教会に安置された。この教会では一般の人も参列が許されると聞き、私も興味半分で出かけたが、広い教会の敷地を何重にも回るほどの長い行列であった。彼を信奉する者にとっては彼の死は大変な出来事であったはずであるが、列を作って順番を待っている人達はまるでお祭のような雰囲気談笑し、私がカメラを向けると笑顔で手を振りながら我も我もと集まってきた。しかし、列を作って順番を待つということのないフィリピンの人達が、しかもこれだけ多く集まり秩序正しく待っている姿は何か異様なものを感じさせた。

数日後同教会で葬儀が行われ、マニラの南のはずれの墓地に埋葬されたが、その行進の規模はマニラ中の交通を止めてしまう程のものであった。新聞・テレビにはやはり一切このことは報道されなかった。

3. 1カ月後

暗殺事件の翌日、翌々日とルソン島のほぼ全域にわたって停電が起り、その後も毎晩マニラの各地でデモが行われたり、道路でタイヤを燃やすなど、かなり不穏な状況にあったが、新聞は相変わらず第一面にはイメルダ大統領夫人の行動を写真入りで載せ、国民の最も知りたい情報については沈黙を続けていた。

このように、マニラに住む人すべてが情報に飢えており、それが増々いろいろな噂をあおりたてていた。信頼できる情報源は、外国人記者が本国に送った記事が載っている外国新聞や週刊紙のみであり、日本の新聞（JAPAN TIMES）やNHKのニュースのビデオテープをコピーしたものが1枚、1本いくらか販売されていた。

アキノ事件は国外で大きく報じられたため、事件以後マニラのホテルの予約取消しが相次ぎ

*小舟浩治 (Koji Kobune), 運輸省港湾技術研究所, 水工部, 海象観測研究室, 室長, 工学修士, 土木工学

年末から翌年にかけて予定されていた国際会議が取り止めになったり、参加者が大幅に予定数を下回ったようである。時に日本人観光客の反応は早く、9月には急激な減少を記録した。1980年以来2年続きで年20%も減少していた日本人観光客も、この年の8月までは順調に増加し、2年前の水準に近付いていたのであるが、10月にはかつてない落ち込みようであった。

さらに、中華航空がフィリピン政府の要請を無視してアキノ氏を運んだという理由により同航空がマニラ乗入れを差し止められ、これに対抗して台湾がフィリピン航空の台北乗入れを差し止めたため、台湾からの旅客が2週間にわたり入国できない状況となった。日本人、中国人共に団体客が多く、マニラのホテルにとっては大きな打撃であった。ちなみに、最も格調高いと言われるマニラホテルでは、以前は真夜中を過ぎてもロビーは客で賑わっていたのであるが、事件以後は最も人の出入りが多い午後7～9時頃でも閑古鳥が鳴くほどの静かさだった。一時予約取消の有無をこのホテルに照会したことがあるが、担当者は「当ホテルでは団体客は少なく、予約取消等一切事件の影響はない」と回答したが、数カ月後にもう一度照会すればよかったと思っている。

4. 2～3カ月後

世界中に大きく報道されたこの事件も、大韓航空のジャンボ・ジェットが撃墜されるというニュースが入ったとたん記者の目は即座にそちらに向いてしまった。マニラに押しかけていた外国記者は一斉に韓国へ流れた。韓国機撃墜は大統領にとっては救いの神であったと言われている。もうしばらく外国記者がマニラの騒乱状況を書き続ければ、抗議運動もエスカレートし大統領府も黙っているわけにはいかなかったであろう。

アキノ氏暗殺の影響は以上のような事件直後もさることながら、この事件で誘発された経済活動の変化の方が更に深刻な問題であった。もちろん数千人の規模のデモ（現地ではラリーと呼んでいる）は連日のように行われていたが、参加者が知識階級ということもあり、秩序ある

穏やかな雰囲気では、行列の上には紙吹雪が舞うといったお祭のような印象ですらあった。

さまざまな水面上の出来事の陰で、何がしかの財産を持つ階層は競って預金を国外の銀行に持ち出したため、またたく間に国の外貨が底をつくまでになった。10月には1ドル11ペソから14ペソに切り下げられたが、それでも外貨の流出は止まらず、中央銀行は市中銀行とのドル取引を停止した。当時のヤミドルの横行はすさまじく、銀行の窓口で衆人環視の中でヤミ取引を観められることも度々あり、銀行ぐるみでヤミドル獲得に力を入れていたのではないかと思われる。

ペソの切下げは輸入品、ことに石油を輸入に頼るフィリピンでは、ガソリン・重油等は即座に値上りし、それに引続き運賃、電気料金、その他の商品へとインフレが進んでいった。初めは大衆とは直接つながりの薄い物品が値上りし、便乗値上げも手伝って、米その他の食料品にも値上げは波及した。

年が改まってからはさらに状況は厳しくなり、外貨がないために原料や部品を輸入できなくなった工場が次々と操業を停止して行った。中でも自動車の組立工場は打撃が大きく、数千人を一時解雇せざるを得なくなった。昨年来3月までに解雇された労働者の数は6万人を越えたという新聞記事を見たように記憶している。

フィリピンの人達の食事はかつて日本でもそうであったように、おかずは魚一切れと漬物少々で御飯を三杯ぐらいおかわり、というふうである。このように大量に食べねばならない米が数カ月の間に2倍近くにも値上りしているのである。さらに解雇が追い打ちをかける。

当初は反政府グループ、いわゆる知識階級の間の問題であったアキノ氏事件も、次第に一般大衆を経済的苦境に追い込むという事態にまで発展していった。道路で停車中の車に物乞いをする子供達の数が増え、窃盗、強盗等の犯罪も増えた。こういう状況下で、3月末、私共の同僚ともいえる国際協力事業団マニラ事務所の職員が自宅で殺されるという事件が起こった。犯人は2日後に逮捕されたが、日本人から見ればわずか三千円のお金欲しさの犯行である。

5. おわりに

フィリピン国の暗い面ばかりを強調したようですが、日常の生活はいたって平穏であり、私自身結構あちらこちら歩いた方ですが、幸い一度も身の危険を感じたということはありません。

美しい海とフィリピンの人達の人間性、それにどんな田舎に行っても英語が通じることが最大の魅力です。もし海外旅行を計画されている方がおられましたら、是非一度フィリピンへ旅

行されることをお勧めします。観光客が現地で落す外貨が、何十万人という人の生活を支えていますから。また日本国内にも一万人近いフィリピン女性が出稼ぎに来ています。同じ飲むなら彼女達の働いている店で飲むことをお勧めします（通常このような店は割高なようですが）。彼女達の客のもてなし様は日本女性のそれとは比べものにならないほど格調高いものでしょうし、それに彼女達が受取る月々500ドル程度の収入は、国で待っている何十人という家族の生活を支えているのですから。

